

# オオシラビソの球果を採取しました

令和5年9月15日(金)、山形市の蔵王温泉スキー場ユートピアゲレンデ付近で、樹氷再生に向けてオオシラビソの球果を採取しました。

激しい虫害によりオオシラビソが消滅し親の世代からの種子の供給が見込めない地蔵山頂付近では、種子や稚樹を導入して次世代のオオシラビソ林の再生を図る必要があります。

当日は、山形県森林研究研修センター、樹氷復活県民会議事務局(環境エネルギー一部みどり自然課)からも作業に参加いただき、5本の木から合わせておよそ320個ほどの球果を採取しました。このような取組は、自然公園法に基づく許可を得て7年前(2016年(平成28年))から始めています。

マツ科の植物であるオオシラビソは、アカマツやクロマツと同様に、球果(いわゆる「まつぼっくり」)を実らせますが、令和3年には、ほとんどの木で着果しないなど、年により豊凶があります。今年の場合は、昨年ほどではないものの着果は見られており、播種・育苗などオオシラビソ林の再生に向けた取組に備え球果を採取することとしました。これまでに採取し保管していた種子を用いて、種子の貯蔵の方法や発芽の状況などについて研究が進められてきたほか、令和5年6月14日には、樹氷復活県民会議により、標高1400mの蔵王山内で800粒が播種され、発芽して生育しています。

1つの球果の中には、かなりの幅はあるもののおよそ300粒の種子が入っています。1本当たりの球果の数もまちまちではありますが、10個から50個、特に多いものでは100個近くついているようです。

球果は乾燥が進むと、球果の鱗片(ウロコのような形状)が開き、隙間から「翼」がついた種子が飛散してしまうため、種子を効率的に得るには、球果の乾燥が進む前に採取する必要があります。今年は猛暑のため、昨年より2週間ほど早く実施しました。

着果の位置は木の上端であるため、先端に刃物を取り付けた長さ12mほどの竿を使って球果を採取しました。オオシラビソの今後の生育を阻害しないよう、樹頂部を外し側方に着果しているものを採取しました。

採取した球果は、オオシラビソ林の再生に向けた播種・育苗の取組に備え、従来と同様、山形県森林研究研修センターで冷蔵保管していただきました。



採取箇所に向かいます



着果の様子



刃を付けた竿を伸ばします



球果が採れました







撮影はいずれも令和5年9月15日